

日本とアジアの電子オルガンコンクール

—コンクールから見てくる電子オルガンの今後—

パネリスト：市川侑乃（演奏：ヤマハ）、森田知恵（演奏・指導：カワイ）、
曾 夢（上海音楽学院：リングウェイ）、古田政伸（横浜音楽院：ローランド）、

中国語通訳：増田真意子（湘南中文学苑）

司会：柴田薫（昭和音楽大学） 金銅英二（松本歯科大学）

書記：森松慶子（ライター、演奏・作編曲）／文責

柴田：電子オルガンの世界では、従来メーカー主導でコンクールが開催されてきた。それぞれのメーカーのコンクールを経験してこられた市川さん、森田さん、曾さんにご自身の経験を語って頂く。また古田さんには、ビクター、テクニクス、ローランドの電子オルガンを扱ってこられた楽器店経営の立場でお話頂く。

市川：私が第1位を頂いた2009年のヤマハエレクトーンコンクールについて概観する。

- 1) ジュニア部門：小学校低学年/高学年/中学/高校
- 2) 大人部門A:ポピュラー音楽系 B:クラシック音楽系
A, B 部門は交互に隔年開催（現在は一本化）

審査方法

- 1) ビデオ審査：課題曲演奏1曲
- 2) 第1次予選
①課題編曲：事前に提示されたピアノ独奏曲3曲から任意の1曲の編曲演奏
②自作曲演奏
- 3) 二次予選（セミファイナル）
①1次予選とは別の自作曲演奏
②当日提示されたモチーフによる即興演奏
- 4) ファイナル
20分以上30分以内のリサイタル形式の演奏
①1ヶ月前に提示された課題の編曲演奏
（2009年はシューベルト「菩提樹」）
②1次、2次予選とは別の自作曲演奏

自分で音色を作る楽器であるので、レジストレーションには力を入れた。レスピーギの「ローマの松」、2管編成の想定で作曲した自作品をクラシカルな様式でレジストレーションし、それとは別の自作曲では電子音をふんだんに使った。

受賞後は電子オルガン演奏家としてソロリサイタル、アンサンブル、オペラやミュージカルの伴奏など、自主企画、ヤマハ主催、他の団体からの依頼などで活動している。韓国、アメリカでの演奏も経験した。コンクールで上位入賞を目指す人たちのレッスンも、3箇所ほどで担当している。

森田：カワイはピアノ部門とオルガン部門が併設された音楽コンクールを行っており、ドリマトーンには

- 1) 子供コンクール：～小学校3年生
- 2) ジュニア部門：小学校4年生～中学生
- 3) 一般部門：高校生以上

大会は次のように運営される。

- 1) 各地の予選会

子供：課題曲群より任意の1曲を選択
既成レジストレーションデータ使用

ジュニア：自由曲1曲

一般：自由曲6分以内曲数自由

- 2) 地区本選会（子供は最終の大会）

子供：課題曲群より1曲選択＋自由曲1曲

課題曲は既成レジストレーションデータ使用

ジュニア：課題曲群より1曲選択＋自由曲1曲

課題曲レジストレーションは自由

一般：課題曲群より1曲選択＋自由曲6分以内

課題曲レジストレーションは自由

- 3) 全国大会（各地区から1～2名の代表）：

ジュニア部門：自由曲1曲のみ

一般部門：出場者に連絡される課題曲編曲演奏
自由曲1曲

小学校3年生までの子供コンクールでは、前述の通り予選では演奏曲は課題曲で、レジストレーションも既成のものを使う。講師が生徒の曲のレジストを作るということはない。小学校3年生までは、演奏自体を重視するという考え方である。

自分は学生時代から講師になっても結果を残したくてコンクールに挑戦し、2008年に全国大会で金賞をいただいた。その後2012年に自作曲で全国大会に出場した。カワイでは、ヤマハのように自作曲を披露する場がない。自作曲を披露する場があれば、新しい展開が生まれるのではないか。コンクール入賞後は、カワイドリームノーツという毎年全国で地区ごとに開催される大規模コンサートのゲストプレーヤーに呼ばれる。個人的には、全国大会で賞を取ったあとの活動の場がもっとあれば、ドリマトーン普及にも役立つし、演奏者にもメリットがあると感じる。

そうした思いが嵩じて今年の3月にカワイを退職、個人の指導と演奏活動を開始した。全国大会の入賞歴をプロフィールに書ける意味合いは非常に大きいので、コンクールはオルガンを演奏できる場であると同時に、結果を残す場として貴重だと思う。

本年カワイ、ヤマハ、アトリエの3社の全国大会を開きに行くことができた。それぞれの特徴があるコンクールで興味深かった。

曾：中国の音楽コンクールについて概要を紹介する。

2001年～ 金鐘賞（ゴールデンベル賞）

設立：中国中央宣伝部

主催：中国文化連合 中国音楽家協会

趣旨：中国の文化レベル向上（音楽全体が対象）

2015年8月～ 小金鐘賞（リトルゴールデンベル賞）

電子キーボード、電子オルガン部門
主催：中国音楽家協会 共催：リングウェイ

本年始まった小金鐘賞電子キーボード、電子オルガン部門には中国全国 28 自治区から 80 余名の参加者があった。このコンペティションは、どのメーカーのどの機種の手鍵盤、電子オルガンでも使用できる点が特徴的である。ヤマハ、カシオ、リングウェイなどの電子キーボードや電子オルガンが演奏された。

小金鐘賞は 2 年に 1 回開催される。電子オルガンはアマチュアとプロの部門がある。プロの部門では音楽の専門学校で 3 ヶ月にわたって予選が行われ、12 名の奏者が決勝に残る。著名な音楽家が審査に当たり、6 名の受賞者が選ばれる。目下中国の電子オルガンコンペティションの中では最も高い評価を得ている。

第 1 次は DVD 予選。プロ部門は各専門学校から教師の推薦で 3 名が選ばれて参加。第 1 次予選の後 24 人に絞られ、さらに 12 人に絞られて決勝が行われる。

リングウェイ、ヤマハのメーカーごとのコンペティションもある。そういったメーカーごとのコンペティションは他の国でもこれまで行われていたが、賞金賞はメーカーを超えたというのが特徴的なので今回特に紹介した。小金鐘賞には、電子キーボード、電子オルガンに加えて、ピアノや古典的なオルガンの部門も設立され、規模を広げて開催するコンクールとして展開されている。

(小金鐘賞の DVD 紹介)



古田 ローランドのコンクールを紹介する前に、前史的なことに触れておきたい。

1970 年代：ビクトロンコンクール（ビクター）

テクニートンフェスティバル（ナショナル）

1990 年代：ビクターとテクニクスが合併し VTM に。コンテストはビクター・ビクター・テクニクス・ミュージックフェスティバルとして開催

2001 年：VTM がローランドに売却され、RMS に

現在：RMS オルガンミュージックフェスティバル
展開スケジュール

楽器店大会（予選）：6 - 7 月

本選：9 月、全国 8 カ所

ファイナル：10 月（本年はいずみホール）

アンサンブル部門は別日程

部門：ソロ演奏小学生部門（年齢別の ABC 3 部門）

／中学生部門／高校生部門／一般部門

フレンドリー部門（予選、本選のみ）

アンサンブル部門（年齢別の ABC 3 部門）

ビデオ予選とファイナルのみ）

アトリエ+ローランドの他の電子楽器 10 人以下
演奏規定：基本的に自由曲 1 曲暗譜演奏

フレンドリー部門のみ課題曲 1 曲演奏

フレンドリー部門は、オルガンの生徒が減ってきたことからピアノの生徒にも参加してもらうべく 4、5 年前に設けられた。ローランドの指定教材を課題曲とし、1 曲演奏してもらう。本選までで終了だが、特に優れた人 1 人にファイナルで特別演奏をしていただく。

アンサンブル部門はここ 3 年ほど行っている。2016 年は 2 月 13 日、大阪市立青少年センターで開催予定。今ビデオ審査中。20 組前後がファイナルで演奏する予定。ピアノの生徒にもオルガンを弾いていただくために、本来電子オルガンのよさである 1 人で音楽のメロディ伴奏ベースすべてを演奏するというある意味ハードルの高いあり方ではなく、複数で分けて楽しく演奏していただいている。グループを結成するとレッスンも長く続けていただきやすく、講師の収入も多少増える。オルガンをもう一度盛り上げる一方策であろう。

司会：多少補足。ローランドでは昔教材を作るグループが曲集を出していた。DVD 付きで、足や手の動かし方が視覚的にわかるようになるものが出回っていた。また 1982 年のテクニートンフェスティバルは審査員に宮川泰、北野正、ゲストに芹洋子など、非常に華やかに開催されていた記録がある。

書記：これも補足として、ブラザーの電子オルガン、エミリオンのコンテストではピアノ連弾やエミリオンのソロ演奏が行われていた。エミリオンで、松田昌などのエレクトーンプレイヤーの市販譜が演奏されていた。エミリオンに関しては、紙媒体でもネット上でも資料がほとんどない。何かご存知の方は知識やご経験をシェアして頂きたい。

司会：指導者としてコンクールに多くの生徒さんを送り出し、上位入賞者を輩出した森下絹代先生に、コンクールを通じての生徒の成長についてお話頂きたい。

森下：いろいろな方のコンクールに携わる中で私がいつも一番求めているのはエレクトーンを媒体とした音楽家を育てること。自分もそういった思いで弾いてきた。エレクトーンだから、という弁解をしたくない。こういう音が出ないからエレクトーンはダメだと言われたら、出るまで、または、出たと聞こえるまで追究する。音楽自体を常に見つめてエレクトーンに向かう姿勢を伝えたい。

司会：コンクールは教育的な場で、すでに楽器が会場に用意され、聴衆も自分で集める必要はない。演奏のみに焦点が当てられており、そこに至る道筋でも、演奏を磨いたその後の人生にまで視野が及ばなくなりがちである。コンクールを経た先輩が個々人で演奏者として活動していくのを見て、これからの人が変えるべき状況を変え始める起点になるのではないだろうか。

